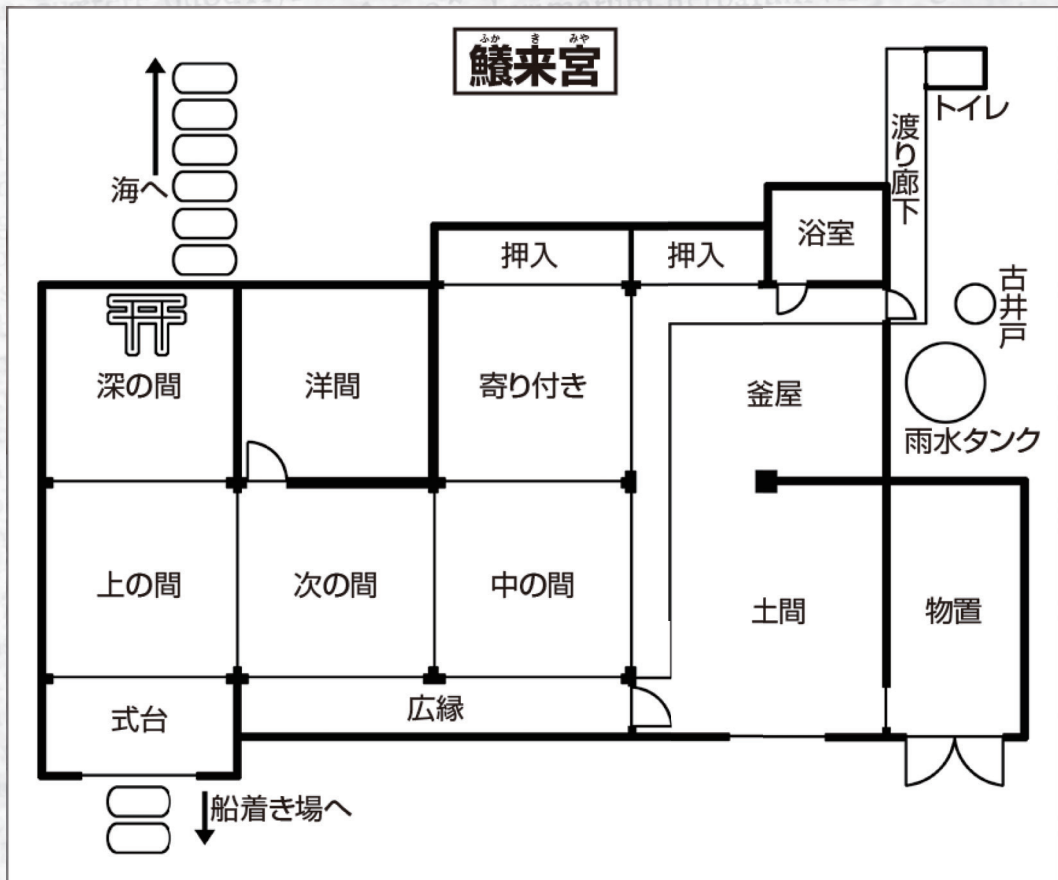


Player Handouts

【クトゥルフ神話TRPG クトゥルフカルト・ナウ】
補遺：プレイヤー資料



(血は海の水よりも濃くて「鯨来宮」)



(血は海の水よりも濃くて プレイヤー資料「燃える瞳を持つ印」)



(しろがねコーヒー プレイヤー資料
「黒表紙の本に描かれたシンボルマーク」)

伊豆の青線地帯で火事 行方不明者多数、全員黒焦げか

静岡県警伊豆警察署は11日、四丁目付近の銀の黄昏館において火事があったと発表した。

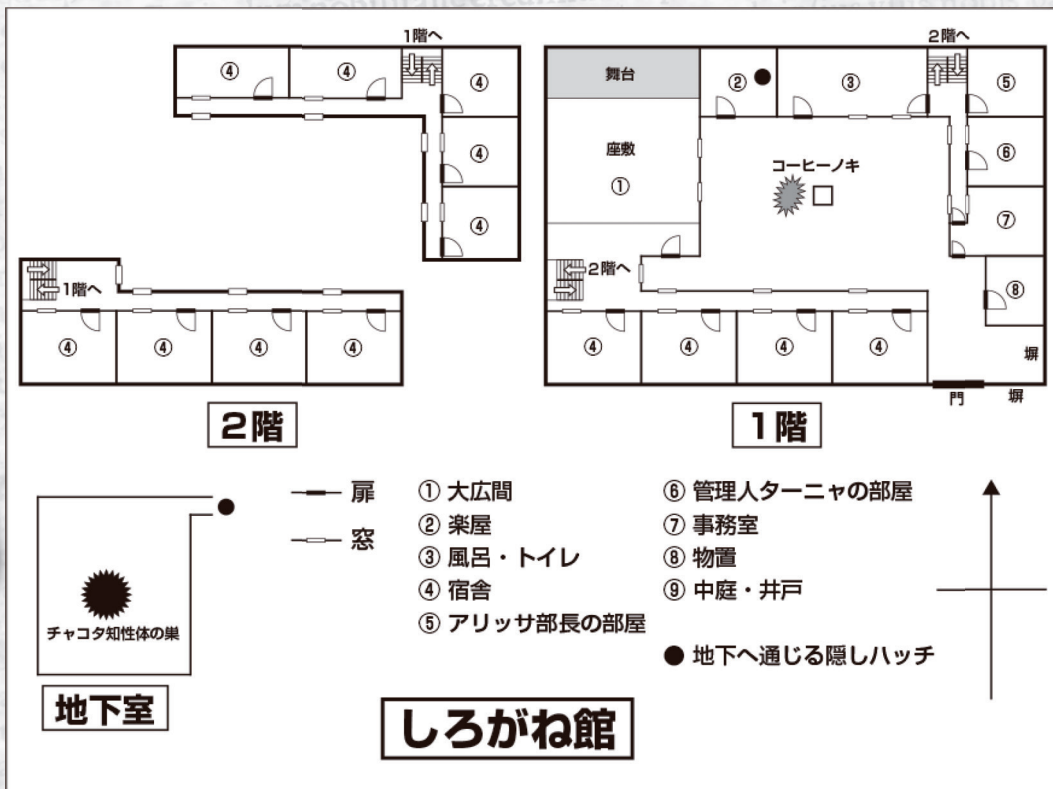
同署によると、多数の人間が館にいた形跡はあるものの、庭の井戸から原形をとどめず炭化した人体の一部が多数発見されたという。

銀の黄昏館は売春の非合法拠点として知られているほか、周囲への被害が少ないことから、同署は対立勢力による放火の可能性が高いとみて調査をする方針だ。

1967年2月13日付け朝刊 新聞記事より

(プレイヤー資料)

(しろがねコーヒー プレイヤー資料「新聞記事」)



(しろがねコーヒー「しろがね館」)

◎大木戸リサからの手紙

親愛なる友人へ

寒さもうやく衰えはじめましたが、皆様にはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

すいぶん長いことご無沙汰してしまい、大変申し訳ありませんでした。

私は今、長野県にある山野部村というところに住んでいます。山奥ですが、空気がきれいで風光明媚な、大変よいところです。

屋敷には、私の他にメイドさんが一人います。そこが少しさびしいといえさびしいのですが、それなりに楽しくやっています。

過日はどうしても体調が優れず、一時期は漫画家稼業の引退を本気で考えていた私ですが、ここでの生活が私の身体にはすいぶんとよかったようです。お医者様の話では、もう数か月も静養を続ければ、元通り完全に治るとのことです。そうしたら、また東京に戻って、漫画家として復帰したいとも考えています。

これも、私の我がままを聞き入れてくださり、いつも応援してくださった皆様のおかげだと本当に感謝しています。

ところで、私は今、少しばかり困ったことに出くわしています。

それというのは…屋敷の周囲に、最近、怪しい人影を見るようになったのです。

実はこの山野部村は、過疎で人が住まなくなった廃村で、住んでいるのは私だけなのです。いいえ、そのはずでした。つい一か月ほど前までは。

なのに、あの人影はいったいなんなのでしょうか？

いえ、あれは本当に人の影なののでしょうか？

奇妙な話だと思われるかも知れませんが、私には

あれが、どうしても普通のホームレスかなにかだとは思えないのです。かといって、熊やイノシシとも思えません。私は今、大変怖い思いをしています。とても言葉では言い表せないほどです。

地元の警察にも相談しましたが、鼻で笑われてしまいました。そもそも、こんな田舎に女一人で住む方がおかしいと言わんばかりの態度で、大変悲しい思いをしました。

いかがでしょうか、もしご都合がつくようでしたら、次の休暇を利用して、私の屋敷に遊びにきていただけないでしょうか。そして、できればこんな私の相談に乗っていただきたいのです。

ご存知のとおり、私は天涯孤独な身です。こんなことを頼めるのは、あなたをおいて他にはいないのです。どうか、昔の友人を助けると思って、お願いをきいていただけないでしょうか。

もちろん、ご滞在中のお世話は、すべてこちらでさせていただきます。

何もない田舎ですが、とにかく景色だけは自慢できます。土地の新鮮な材料を使った、我が家のメイドさんの心尽くしの料理もごちそうできます。(これが、なかなか期待できるんですよ！ 私も毎日、楽しみにしています)

久しぶりに、つもる話もしたいと思っています。

お友達を誘っていただいても、かまいませんよ。ぜひ、皆様で遊びにきてくださいね。

どうかお待ちしております。

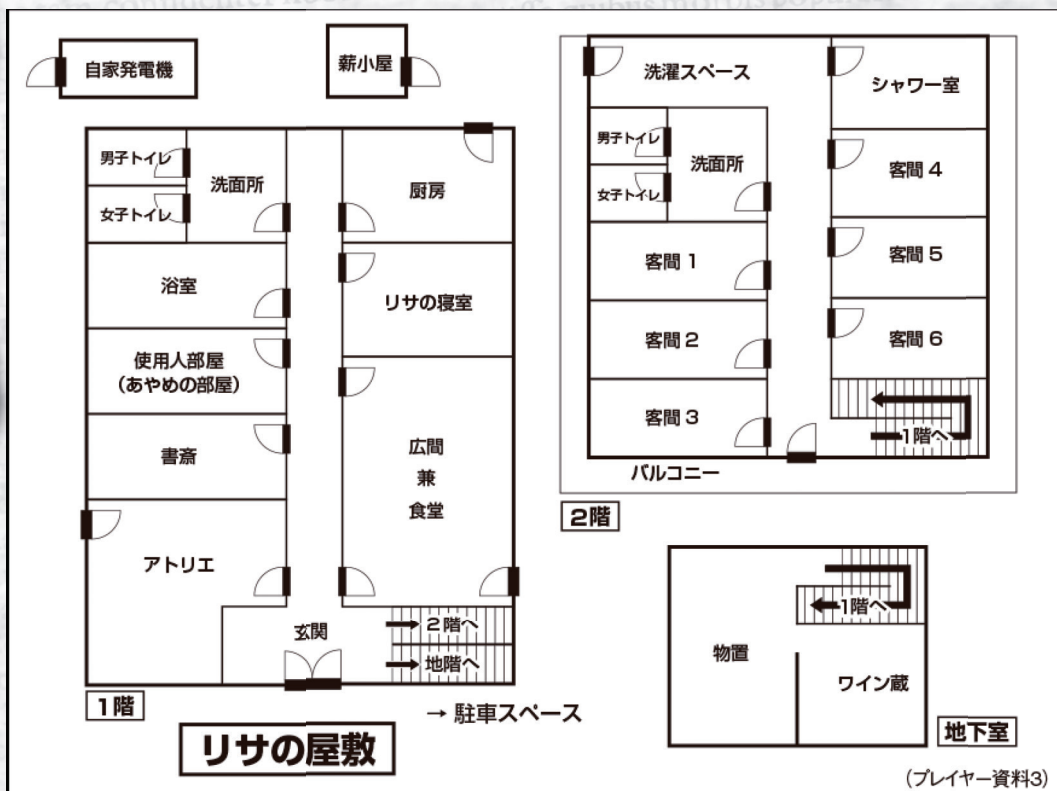
あなたの友人 滝夜叉姫こと大木戸リサより

(プレイヤー資料1)

(とある漫画家に起きたこと プレイヤー資料1「大木戸リサからの手紙」)



(とある漫画家に起きたこと プレイヤー資料2「山野辺村周辺図」)



(プレイヤー資料3)

(とある漫画家に起きたこと プレイヤー資料3「リサの屋敷」)

室井細胞について

御津門大学の研究室には、「室井細胞」と呼ばれる不思議な細胞サンプルがある。それは一見すると「不定形の軟泥」としか表現しようのないもので、ただシャーレの中でじっとしているだけだ。

ところが、驚いたことに、この泥のように見える細胞の塊は、分裂することなく、一切の代謝のないまま同じ細胞が80年以上も生き続けているというのだ。

この不思議な細胞は、1930年に行方不明になった生物学者の室井文治氏の遺品から発見されたものであり、現在は御津門大学にて管理されている。

残念なことに、室井氏はこの細胞についての記録をほとんど残しておらず、ただサンプルの入ったケースに「帝国ホテル」というメモが記されていただけだという。

そもそもこれが本当に生物と定義できるのか疑問という研究者も多く、真相はいまだわかっていない。

参考論文

西垣美穂「1930年に採取された不定形の軟泥について——室井細胞における経過観察」御津門大学理学部生物学科紀要

(白無垢の母 プレイヤー資料「室井細胞について」)

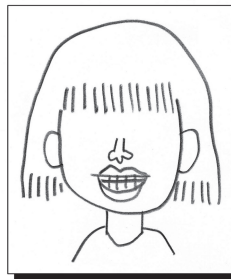
帝国ホテルの地下に泥水が湧き出す

帝国ホテルの地下プールは、関東大震災で被害を受けたため、ずっと使われていなかった。

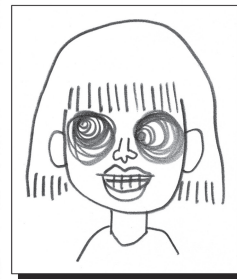
ところが、そのプールに異臭を放つ泥がこびりついて、帝国ホテルでは清掃に大わらわであるという。

どうやら、プールの底の亀裂から、地下水に混ざって大量の泥が湧き出したらしい。今は水は引いているが、泥はプールの縁にまでこびりついており、あと少しでプールの外にまであふれ出していたかもしれない。そうならなかったのは、ホテルにとっても宿泊客にとっても不幸中の幸いなことであった。

(白無垢の母 プレイヤー資料「1930年の新聞記事」)



(白無垢の母 プレイヤー資料「お母さんの絵」)



(白無垢の母 プレイヤー資料「白無垢の仮面」)

ある女性記者の手記

あれは昭和の初め。日本で軍靴の音が大きくなっていた時期です。

私は帝国ホテルで、その少女と出会いました。

本当の母親も知らず、忌まわしい人たちに白無垢の巫女などというものに祭り上げられた、かわいそうな女の子です。

でも、今は藁の呪縛を断ち切り、解放され、どこかで幸せに暮らしているはず。それは彼女自身の強さによって勝ち得たものでした。

ほんのわずかな間でしたが、その子は私のことを母親のように思ってくれていました。それは私にとって、なによりも嬉しい思い出なのです。

(白無垢の母 プレイヤー資料「女性記者の古い手記」)